

一時停車

羽鳥 善行

春の麗らかな日曜日、不二雄は日帰りの旅に出た。日光の緑と社寺は、彼を惹きつけてやまなかった。社会人になつた妹はその夜、両親と彼を食事に招待していた。彼自身は社会科の教師として、都内の中学校に勤務していた。

早朝、彼はリュックサックを背負い、東京・北千住の自宅を出た。七時すぎに北千住駅を発つた快速電車は、二時間足らずで東武日光駅に着いた。彼はセーターと薄手のジャンパーを着込んでいた。

彼はバスに乗り、奥日光へ向かった。第二いろは坂から明智平を経て、中禅寺湖畔に着いた。バスの発車時刻に留意し、急いで中禅寺湖や華嚴の滝をカメラに納めた。ふたたび、バスに乗り、第一いろは坂を下つた。

参道をてくてくと歩き、陽明門をくぐり、東照宮を参拝した。三猿や眠り猫の彫刻の前に人だかりができていた。大谷川の清らかな流れを眺めつつ日光橋を渡り、付近の店でカツ丼を食べ、帰途についた。彼は門前町らしい家並みを歩き、駅に向かった。人の行き来は少なく、地元の人よ

りも観光客の数のほうが目についた。やがて、東武日光駅の瀟洒な駅舎が現われてきた。

電光掲示板で、浅草行き快速が一時ごろ発つことを確かめ、切符を買い、売店で缶ビールと裂き鳥賊を手に入れた。改札口を通つて、快速の先頭車両に乗り、缶ビールのプル・タブを開けて飲み始めた。構内放送が電車の発車を告げるとまもなく、車両が動き始めた。杉並木の緑が車窓から見えた。やがて、彼は眠りについた。

小一時間以上が経過し、彼は目が覚めると、電車が停止しているのに気づいた。何があつたのか、乗客たちは妙に平穏だ。車掌が車内放送をしている。「強風のため、速度を落として運転します」強風か、仕方ない。そのうち落ち着くだろう。数十分が経過した。のろろ運転が続いたと思いきや、また、電車が止まった。「架線に袋が掛かり、除去作業ができるまで一時停車します」一時停車か、困つたものだ。四時半ごろには帰宅できる予定だったのに。

彼は一両目の後方の、四人掛けの座席を独占していた。リュックサックを脇に置き、缶ビールと裂き鳥賊のごみは袋ごと、足元に置いた。乗客は半分以下である。

架線に掛かつた袋はどんな具合かと、少しよろめきながら運転室の前にたどり着いた。黒く大きな袋が架線に引つかかつていた。付近の企業が保管するポリエチレン製の大袋が、管理不行き届きで、強風に煽られて飛ばされてきた

のだ。仕方がないと思ひながら、座席に戻った。他の乗客たちも、運転室の車窓の先の黒く大きな袋を見ていた。すると、車掌のアナウンスが流れた。「車内に病人が出ましたので、救急車で搬送されるまで停車します」強風、飛来した大袋、そして病人。よくよく不運なものである。強風の天気予報はなかつた気がする。脱線事故で死亡する人間もいるのだから、このぐらい我慢できなくてどうする。

それから一時間、いや、一時間半ほどが過ぎたころ、救急車が到着し、まもなく、作業用車両も到着して、病人の搬送と大袋の除去が達成された。四時が過ぎていた。妹がレストランに予約したのは六時だったはずだから、自宅に戻らず、北千住駅で三人と落ち合えば間に合うだろう。強風はやみ、快速は発車後、順調に進行している。今後、このような事態は起こらないだろう。彼はまどろみ、眠りに落ちた。

車両は急に停止し、彼は目が覚めた。乗客がどんどん降りて行く。大きな駅に着いたからなのか、一斉に降りている。蛻の殻になる勢いである。構内放送がかすかに流れている。彼は荷物を持ち、プラットフォームに降りた。新栃木駅に着いていた。「この快速は下りの、折り返し運転になりました」彼は激怒した。ただでさえ、強風と大袋と病人で遅れに遅れたのに、電車を降りるというのか！プラットフォームでは、大勢の人が向こう側に到着する電車を待ち

始めている。中年男性が駅員に文句を言っている。彼も駅員に近寄り、つぎの快速は何時ですかと訊くと、わかりませんと言う。ふざけた話だ。血の気の多い民族ならば、暴動を起こすだろう。彼は考えた。快速に拘泥していたら、約束した時間に間に合わなくなる。他の乗客たちも、臨機応変に乗車し始めている。「善は急げ」「時は金なり」という諺もある。特急電車が滑り込んだので、彼も乗車した。すると、車内アナウンスが流れ、「特急にご乗車された方は、特急券をお求めください」と言っている。この期に及んで、特急料金はないだろう。快速が折り返し運転しなければ、特急に乗る必要もなかったのだから。

彼は扉のなかの乗車室に入ろうとせず、出入口の通路に佇んでいた。車掌が特急料金の支払いを求めに来たら、他の車両に移ればいいのだ。

そうして彼は、目の前に立っている妙齢の女性に目を遣っていた。

……例の日帰りの旅から数年が経過した。あの日の夜、不二雄は予定どおり、四人で会食することができた。

幸運だったのは、ある女性と特急で乗り合わせたことである。共に北千住の住民だったので、お茶を飲む程度の際から始まり、結婚し、子宝にも恵まれた。つくづく、何が幸か不幸かわからない、と彼は思った。